

Working Paper Series

No.54

日本におけるチャイルドレスと社会サポート
Childlessness and social support in Japan

阿部 彩 (東京都立大学)
ABE Aya

2021年10月



〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 6階

<http://www.ipss.go.jp>

本ワーキング・ペーパーの内容は全て執筆者の個人的見解であり、国立社会保障・人口問題研究所の見解を示すものではありません。

日本におけるチャイルドレスと社会サポート

阿部 彩 (東京都立大学)

1. はじめに

チャイルドレス (childless、「無子」とは、「結婚の有無にかかわらず子供のいない」〔中村・菅原 (2016)〕ことを意味する。人口の未婚化や、晩婚化・晩産化といった「結婚や出産の先送り行動」のひとつの帰結がチャイルドレスの人々の割合の上昇である〔守泉 (2019)〕。日本のチャイルドレスの割合は、OECD 諸国の中でも最も高くなっており、1970 年生まれのコーホートにおける「確定チャイルドレス (definitive childless)」の割合は 27% となっている (図 1)。すなわち、1970 年生まれの女性の 4 人に 1 人は 50 歳時点において、子どもがいなく、おそらく、子どもをもたないまま一生を終えると考えられる。同様の状況は男性にも見られ、日本社会において、チャイルドレスの人々はもはや珍しい存在ではなく、ライフコースの一つのパターンとして定着したと言えよう。

少子化が日本よりも先に進展していた先進諸国においては、早くからチャイルドレスについての研究が活発であり、チャイルドレスの人口動態や、属性分析、チャイルドレスの人々の健康状況や精神状況などの研究が蓄積されてきた〔Dykstra and Hagestad (2007); Hansen, Slagsvold and Moum (2009) 等〕。中でも、本稿が着目するのは、チャイルドレスの人々の社会ネットワークや社会サポート、孤立、社会的排除について着目する分析である〔Albertini and Mencarini (2014) ; Cwikel, Gramotnev and Lee (2006) ; Deindl and Brandt (2017) ; Mair (2019) ; Penning and Wu (2014) 等〕。これらの分析は、主に高齢者を対象としており、その背景には、社会保障制度が成熟した福祉国家においても、高齢期のサポート (身体的介護、送迎などの移動、家事の手伝い等) については、家族、特に子どもが担う割合が多いということがある。また、友人や地域とのつながりについても、子どもの学校や子ども向け活動を通じた交友や、「ママ友」「パパ友」などといった社会ネットワークの構築が、地域における孤立を防ぐことも考えられよう〔Mair (2019)〕。さらには、子どもを重視し、子どもを産むことが期待されている社会において、チャイルドレスであることは批判や偏見の対象となることも考えられる。実際に、オーストラリアの若年層 (20~40 歳代) のチャイルドレスの社会ネットワークについての研究では、チャイルドレスであることがスティグマとなり、社会的排除に繋がっているという報告もある〔Turnbull, Graham and Taket (2016)〕。

日本においては、2000 年代からチャイルドレス (または無子) についての研究が、主に人口学分野にて行われてきた〔菅 (2008) ; 守泉 (2019)〕。これらの研究では、チャイルドレスの人々の人口動態やその規定要因の詳細な分析が行われており、重要な知見が得られているものの、チャイルドレスの人々の孤立や社会サポートといった観点からの分析は行われていない。しかしながら、上にあげた他国におけるチャイルドレスの状況は、日本においても当てはまると考えられ、日本におけるチャイルドレスの人々の社会サポートの実態

の解明は重要である。ヨーロッパのチャイルドレスの研究においては、子が親のケアを担うべきといった家族主義が強い国や、社会保障制度における家族の役割が大きい国においては、チャイルドレスの人々が孤立し、必要なサポートが得られない傾向がより強まることがわかっている〔Baranowska-Rataj and Abramowska-Kmon (2019) ; Deindl and Brandt (2017)〕。日本の社会保障制度も、公的な支援の前に家族による共助が前提とされており、チャイルドレスの人々の孤立傾向をより高めている可能性がある。さらには、日本の人々は情緒的サポート、行為的サポートの殆どを「家族」に頼っており〔国立社会保障・人口問題研究所(2018)〕、また、近年においては、この割合がますます高まっていることが報告されている〔大日・菅野(2016)〕。これらを踏まえると、チャイルドレスの人々の孤立、社会サポートの欠如は、日本において深刻な状況にあることが懸念される。

そこで、本稿では、国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合い調査(第2回)」(2017年)を用いて、チャイルドレスの人々の社会サポートについて、子どもがある人との比較から検討する。なお、本稿においては、分析の視点に、貧困という観点を投入する。何故なら、日本においてはチャイルドレスとなる要因の一つとして未婚があり〔守泉(2019)〕、また、婚姻状況と社会経済状況(socio-economic status : SES)に密接な関連があること、さらに、孤立や社会サポートについても貧困との関連があること〔石田(2011)〕が指摘されているからである。本稿では、まず、チャイルドレスの人々の出現率および属性を確認し、その上で、チャイルドレスとSESの関連、チャイルドレスと社会サポートの関連を分析する。その上で、SESの影響を除いても、チャイルドレスであることが社会サポートと関連があるのかを実証する。

2. 先行研究

(1) 海外におけるチャイルドレスと社会サポートの研究

先述したように、海外においては、チャイルドレスの人々の社会サポート、孤立、社会的排除の関連を実証した分析の蓄積がある〔Albertini and Mencarini (2014) ; Deindl & Brandt (2017) ; Dykstra & Hagestad (2007) ; Mair (2019) ; Hansen, Slagsvold & Moum (2009) ; Penning & Wu (2014) 等〕。これらの結果を概観すると、高齢期において、チャイルドレスの人々の方が、子どものある人々に比べ、社会サポートが少ないという点においてはおおむね一致している〔Dykstra and Keizer (2009)〕ものの、若年・中年期のチャイルドレスの人々の状況や、社会サポートの中でもその種類によっては、チャイルドレスの人々の方が子どものある人よりも多いものがあるということが報告されている〔Dykstra & Hagestad (2007) ; Deindl & Brandt (2017) ; Mair, (2019)〕。また、この関連は、チャイルドレスの個人の性別および婚姻状況(有配偶、離別、死別、未婚)によっても異なる。

まず、社会サポートの種類による違いを見ると、チャイルドレスの人々は、子どものある人に比べ、介護など負担が大きいサポートについては不足・欠如していることが多いものの、情緒的なサポートや日常の家事や移動サポートについては、友人や隣人などの家族外の私

的サポートによって補っており必ずしもそれらが不足しているわけではない。例えば、ヨーロッパの12カ国の日々の活動に何らかの支障がある個人(50歳以上)の分析を行った Deindl & Brandt (2017) によると、チャイルドレスの人々は、インテンシブなサポートについてはプロのサービスに頼る割合が多いものの、時々インフォーマルなサポートについては、近親・同居でない親戚、友人、隣人などから得ている。また、友人や隣人との交流については、特に、女性においては、チャイルドレスは、子どものある女性に比べて多い傾向がみられるという [Cwikel, Gramotnev & Lee (2006); Dykstra & Hagestad (2007) ; Mair (2019)]。例えば、Mair(2019)によるヨーロッパの17カ国の50歳以上の個人を分析結果によると、チャイルドレスの人々は、子どもがある人よりも友人の数が多かった (Mair, 2019) 。また、未婚のチャイルドレスの女性は、配偶者という最も大きいサポートがない一方で、社会生活においては有配偶の人々よりも活発であり、配偶者・子ども以外の家族(兄弟姉妹や甥、姪など)や友人などとの付き合いが多いという [Dykstra & Hagestad (2007)]。また、これを婚姻状況別の分析とした、カナダの60歳以上の高齢者の研究によると、有配偶、離別の高齢者の場合は、子どもがある人に比べて、子どもがない人の方が、家事サポート、移動サポートおよび情緒的サポートにおいて同居家族以外からのサポートを受けることが多いことが報告されている [Penning & Wu (2014)]。また、未婚と死別の高齢者の場合には、子どものない人の方が家事サポートを受けることは少なくものの、その他のサポートについては差がないという [Penning & Wu (2014)]。しかしながら、高齢期におけるインテンシブな社会サポートの担い手の不足は、チャイルドレスの人々の共通の問題として存在しており [Dykstra and Hagestad, 2007]、(子どもからのサポートの代替として) 公的・民間のプロからのサポートを得る割合が多い [Deindl and Brandt (2017)]。

このように、子どもがないことと、社会サポートの多寡は、プラスの関係とも、マイナスの関係も見られるが、その関連の強さは、その個人が属する社会の規範や家族主義の強さによって異なることが指摘されている [Baranowska-Rataj and Abramowska-Kmon (2019) ; Mair (2019) ; Albertini and Mencarini (2014)]。Baranowska-Rataj and Abramowska-Kmon (2019) は、ヨーロッパの24カ国の65歳以上の高齢者のデータを用いて、他者との交流の頻度を社会サポートの多寡を予測する変数と捉え、子どもの有無と交流の頻度の関係の強さが、国における家族主義の度合いによって異なるのかを分析している。その結果、国において「成人した子どもは、自分のウェルビーイングを犠牲にしても親の介護をする義務がある」との考えや「どのような親であっても、子どもは親を尊敬し愛すべきである」との考えに賛成する人の割合が高い国ほど、チャイルドレスの人が、子どものある人に比べて高齢期に他者との交流が少ない傾向が見られた。また、高齢期における公的年金の所得代替率が高い国ほど、同様にチャイルドレスの人々の交流が少ない傾向があった。

(2) 日本におけるチャイルドレスと社会サポートの研究

日本におけるチャイルドレスの人々の先行研究は、主に人口学的な観点から行われてき

ている〔菅（2008）；守泉（2019）〕。守泉（2019）は、チャイルドレスの長期的動向と属性分析を行っており、若い世代ほど未婚の自発的なチャイルドレスが増加していることを報告している。また、30 から 49 歳の有配偶女性のチャイルドレスには初婚年齢の高さが影響しているものの、25 から 39 歳の未婚女性のチャイルドレスについては、低収入といった社会経済状況も関連していることがわかっている。

中村・菅原（2016）は、日本のチャイルドレス高齢者のサポートの問題について論じている数少ない研究である。ここでは、厚生労働省「国民生活基礎調査」を用いて、独身（離死別含む）の高齢者を、独身（子と）同居世帯、独身（子と）別居世帯、独身チャイルドレス世帯に分けて分析しており、チャイルドレス高齢者は子どもがある高齢者よりも、介護度が高い高齢者が少ないこと、固定資産税が少なく、純貯蓄額が高いことが報告されている。中村・菅原（2016）は、この理由として、独身チャイルドレス高齢者は介護が必要となった時に施設に入る可能性が高いこと、また、その費用のために貯蓄を持っておくというリスク管理行動を行っているのではないかと推測する。しかし、中村・菅原（2016）は、有配偶のチャイルドレスの介護問題については、「高齢者夫婦世帯では、チャイルドレスであるかどうかに関わらず、配偶者が重たる介護者となる世帯が大多数である」〔*Ibid.*, p.364〕として、論じていない。

一方で、社会ネットワークの先行研究を概観すると、我が国における特徴として、社会ネットワークが家族に依存していることが指摘されている。宍戸（2008）による日本版総合的社会調査 2003 年データ（JGSS2003）を用いた分析によると、アメリカと比較すると日本人の社会ネットワークは「配偶者と親子だけの組み合わせである小家族型」が多く〔宍戸（2008）, p.96〕、また、小家族型になるか否かの規定要因としては有配偶であるかが最も大きなものであった〔宍戸（2008）, p.98〕。社会経済な要素においては、学歴が高いほど家族・親族以外の相談者がある「非親族内包型」のネットワークとなる確率が高かった。同じく JGSS2003 を用いた石田（2011）も、離死別経験者などが、孤立しやすいことを実証し、日本人の情緒的サポートが家族・親族を中心とするものであることを指摘している。さらに、国立社会保障・人口問題研究所（2014）の分析においても、人々は情緒的サポート、行為的サポートの殆どを「家族」に頼っているという結果が得られている〔国立社会保障・人口問題研究所（2014）, p.22〕。

これらを踏まえると、日本のチャイルドレスの人々は、子どもや子どもの配偶者、孫といった家族・親族が存在しない分、社会ネットワークが小さく、サポートを得にくい状況にあると推測される。彼らは、諸外国のチャイルドレスの人々のように、（インテンシブなサポートを除けば）社会サポートを、家族外から得ているのか、これが本稿のリサーチ・クエスチョンである。

なお、チャイルドレスと密接な関係にあるのが、単独（一人暮らし）世帯の問題である。単独世帯の孤立や貧困、社会サポートの問題については、多くの先行文献が存在する〔藤森（2010）；藤森（2017）等〕。しかしながら、後述するように、チャイルドレスの半数は配偶

者またはその他の家族と同居しており、単独世帯ではない。また、単独世帯であっても、別居する子どもがいる場合も多いであろう。そのため、この二つの問題は同一ではない。しかしながら、チャイルドレスであることの影響は、少なからず、単独世帯であることの影響や、無配偶であることの影響と関連していると考えられるので、分析においては、これらの問題を丁寧に解きほぐしていく必要がある。

3. データ

本稿が用いるのは、国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合い調査（第2回）」（2017年）である。本調査は、同年の厚生労働省「国民生活基礎調査」のために抽出された地区から300地区を無作為抽出し、地区内の全世帯を対象としており、世帯主が記入する世帯票と18歳以上の全世帯員が記入する個人票からなっている。分析には、世帯票と個人票を突合し、20歳未満かつチャイルドレス状況と年齢・性別が不明な標本を除いた18,874票である。チャイルドレスの判定は、個人票にて「あなたにはお子さんがいらっしゃいますか。」の問いに対して、「いない」と答えた場合にチャイルドレスと定義した。回答者のうち、チャイルドレスと判定されたのは5,245票（27.8%）であった。

社会サポートについては、「あなたは次にあげる（1）～（9）の事柄で頼れる人はいますか」との問いのうち、「日頃のちょっとしたことの手助け」を「日常的サポート」、「愚痴を聞いてくれること」を「情緒的サポート」とし、これらに「いない」または「そのことでは人に頼らない」と答えた場合に、これらのサポートがないと定義する。「そのことでは人に頼らない」の回答については、「サポートの欠如」と捉えるべきか判断が分かれるところではあるが、ここでは、貧困研究における適応的選好形成（欲しいものが入手できないとわかった時に、それ自体を欲しいと思わないように自分の選好を再形成すること）を踏まえ、「欠如」と解釈する。なお、この問いは、枝問として「それは誰ですか」と訊いており、選択肢には「家族・親族」「友人・知人」「近所の人」などが含まれる。そのため、この問いにおいては、同居の家族からのサポートも含まれる。

貧困については、二つの定義を用いて貧困世帯を判別した。「生活と支え合い調査」においては、各世帯・個人の所得については訪ねていないが、世帯票にて、調査の前月の世帯支出の総額および過去1年間に食料や衣料が金銭的理由で購入できなかった経験、また、電気料金、ガス料金、水道料金、電話代、その他の債務が経済的理由で支払えなかったことがあるかを訊いている。そこで、一つ目の定義は、支出総額を世帯人数で調整した等価支出総額を用いるものであり、低支出の定義は、等価世帯支出の中央値の50%である。二つ目の定義は、剥奪指標（deprivation index）の概念をよるものであり、食料が買えなかった経験、衣料が買えなかった経験、電気料金の未払い、ガス料金の未払い、水道料金の未払い、電話代の未払い、その他債務の不履行の6つの項目について、該当する数を剥奪指標とし、指標が0以上である場合に「剥奪状況にある」と定義した。この6つの項目を用いた剥奪指標の妥当性は、阿部（2014）にて実証されている。

4. チャイルドレスの属性

(1) チャイルドレスの割合

まず、年齢層別・性別にチャイルドレスの割合を示す(図2)。20歳代においては、チャイルドレスの割合は8割を超えているが、30歳代になると半減し、男性は49.2%、女性は36.2%となる。しかしながら、今後出産することが殆んどないと考えられる50歳代の女性においても15.8%がチャイルドレスであり、男性では26.4%となっている。また、男女ともに年齢と共にチャイルドレスの割合は減少するものの、80歳以上においても男性では7.2%、女性では6.8%がチャイルドレスである。どの年齢層においても、男性の方が女性に比べてチャイルドレスの割合が高くなっている。

(2) チャイルドレスの家族構成

次に、チャイルドレスの人々の属性を確認する。まず、チャイルドレスの人々の世帯構成をみたものが図3である。年齢が上がると共に、「親・祖父母と同居」が減少し、「夫婦のみ」と「単独」世帯が増加している。確定チャイルドレスとなる50歳代では最も多い世帯構造は「夫婦のみ」(32.3%)、次が「単独」(27.2%)となっている。興味深いのは、確定チャイルドレスの人々の過半数は、配偶者またはその他の同居者がいる世帯に属することである。80歳以上では、単独世帯が49.0%となっており、不詳3.1%を考慮すると約半数であるが、50歳代、60歳代、70歳代においては、「夫婦のみ」「親・祖父母と同居」「その他世帯員と同居」を合わせると「単独」世帯を上回っている。すなわち、チャイルドレスと「単独(单身)」世帯とは、重なる部分もあるものの、同一の集団を表しているわけではないことがわかる。

(3) チャイルドレスの学歴

次に、チャイルドレスの人々の学歴に着目すると、チャイルドレス(図4では「無」と表記)とそうでない人(同、「有」と)の違いは、年齢層によって異なる。20歳代、30歳代においては、チャイルドレスの方が大学・大学院卒の割合が高く、中学校卒、高卒が少ない傾向が見られる。これは、チャイルドレスの女性の方が高学歴であるという他国の所見と同じ結果となる。しかし、40歳代、50歳代においては、チャイルドレスとそうでない人の間に統計的に有意な差は見られず、60歳代以降は逆に、チャイルドレスの方が、学歴が低い傾向がある(うち、統計的に有意なのは60歳代)。若い年齢層(20歳代、30歳代)のチャイルドレスは、夫婦世帯の割合は14%ほどであり、親との同居率が5割を超える(図3)ことから、現在は未婚であり、今後、子どもをもつ可能性が高い層が多いと考えられる。すなわち、学歴が高いことが、経済的自立を遅くし、結婚を遅くしていることが、チャイルドレスの要因のひとつであると推測される。

(4) チャイルドレスと貧困

最後に、チャイルドレスの人々の貧困の状態について見てみよう。学歴の分析を踏まえて、ここからは、年齢層を3区分(40歳未満、40~59歳、60歳以上)に分けて分析を行う。ま

た、貧困の状況は男女格差も大きいと考えられるため、男女別に集計した。図5は、低支出世帯に属する割合、図6は、剥奪状況にある世帯に属する割合である。まず、40歳未満の年齢層においては、支出が低い層の割合は差がないものの、平均剥奪項目数では、男女ともに子どものある人の方がチャイルドレスの人々より高い傾向があり、女性については、統計的に有意な差が見られる。これは、子育て層においては、子どもにかかる支出が多いため支出は高いものの、家計のやり繰りといった意味においては家計が逼迫しており、公共料金の支払いの滞納などが起こっている割合が高くなると考えられる。逆に、低支出率について差がないことは、本来であれば、子どものための支出が多く低支出率は低い子どものある層にて、十分な支出ができていない世帯があることが示唆される。

逆に、60歳以上においては、子どものある人でも、子育て期は終了しており、支出については自分および配偶者の支出が中心になると考えられ、その比較においては、チャイルドレスの人々の方が、支出が低い割合が多い。また、平均剥奪項目数でも、チャイルドレスの人々の方が高い傾向があり、男性ではこの差が有意である。すなわち、60歳以上においては、チャイルドレスの人々の方が、子どものある人々に比べ、経済状況が厳しいことが示唆される。

40~59歳の年齢層については、40歳以下層と同様に、平均剥奪項目数では、子どものある人の方が高い傾向が確認される。子育て期の子どものある人々においては、子どものための支出によって、家計が逼迫することを垣間見ることができる。低支出についても、男女ともにチャイルドレスの人々の方が高く、男性においては統計的に有意な差があり、子育て費用が発生しないこの層において支出額が比較的に低い人が多いと言える。

5. チャイルドレスと社会サポート

ここまで、チャイルドレスの人々の年齢別の出現率、世帯構造、学歴、貧困状況を概観した。それでは、チャイルドレスの人々と子どものある人にて、得られる社会サポートに違いがあるのだろうか。

(1) 子どもの有無別の比較

まず、日常的サポートがない人の割合を、年齢別、性別、子どもの有無別に見たものが図7である。日常的サポートがない人の割合は、20歳代から60歳代・70歳代まで上昇し、その後減少することがわかる。また、同年代で比べると、20歳代の男女、30歳代の女性においては、チャイルドレスの人々と子どもがある人の差は統計的に有意ではないが、30歳以降の男性、40歳以降の女性においては、子どもの有無による差が顕著であり、また、年齢が高くなるほど、その差も大きいことがわかる。男性は、そもそも女性よりも日常的サポートがない人が多いが、男性のチャイルドレスの人々は特にその割合が高く、女性チャイルドレスの人々との格差も大きい。女性と男性の差を見ても、子どもがいる人における男女差は、30歳代までは殆ど差がなく、60歳代、70歳代にむけて拡大するものの、チャイルドレスの

人々の間の男女差に比べれば小さい。

次に、情緒的サポートについて、同様のグラフで確認すると（図8）、男女ともに30歳以上のすべての年齢層において、子どもの有無別の差が統計的に有意であり、また、年齢の上昇とともに格差も拡大していることがわかる（70歳代まで）。また、日常的サポートと同様に、子どもの有無別の差は、男性にて、特に大きい。

ここから、日本におけるチャイルドレスの人々の社会サポートについて、以下を観察することができる。まず、Dykstra & Hagestad（2007）によるレビューによると、子どもがあるかないかによる社会サポートの影響は特に、男性にて現れやすいが、この現象は日本にも当てはまる。図7と図8からは、男性のチャイルドレスの人々が特に社会サポートが得られない割合が高いことがわかる。

次に、他国の先行研究では、介護などのインテンシブなサポートについては、チャイルドレスの人々が不利な状況にあるが、情緒的サポートや軽度のサポートについては、必ずしも、子どもがないことがそれらの欠如と関連しているわけではなく、特に、女性における情緒的サポートについては、チャイルドレスの人々の方が、子どものある人々よりも多く得ているという報告がなされているが、日本においては、そのような傾向は見られない。情緒的サポートであっても、男女ともに、チャイルドレスの人々の方が欠如している割合が高い。

最後の観察は、先行研究においては、高齢期における社会サポートの格差を指摘するものが多く、確かに、日本においても子どもの有無による社会サポートの格差は、年齢と共に上昇し、60・70歳代にピークとなる傾向があるが、ライフコースの早い時点、既に30歳代において統計的に有意な差があることである。30歳代は、今後子どもを持つ可能性がある年代であるが、そのようなライフコースの途中段階のチャイルドレスであっても、社会サポートの欠如と関連があることが示唆される。

（2）重回帰分析

このようなチャイルドレスであることと社会サポートの欠如の関連は、どのようなメカニズムでつながっているのであろうか。日本においては、未婚で親になる割合が欧米諸国に比べると低いため、未婚の人々の殆どはチャイルドレスである。そのため、社会サポートの欠如と本当に関連しているのは「未婚であること」であり、チャイルドレスと社会サポートの欠如は「見せかけの相関」である可能性がある。また、多くの文献が指摘しているように、単独（一人暮らし）世帯であることと、社会的孤立との関係も存在する。単独世帯であるということは、同居の家族がいないということであり、社会サポートの多くを家族に依存する日本においては、単独世帯であることが、社会サポートが欠如する「真の要因」である可能性もある。また、社会サポートの欠如と、未婚であること、単独世帯であることの三つに関連する「影の要因」として貧困が存在している可能性も否めない。

そこで、婚姻状況、世帯タイプ（単独世帯であるか否か）、貧困状態であるか否か（剥奪指標が1以上）を考慮した上でも、なおかつ、「チャイルドレスであること」が、社会サポ

ートの欠如と関連があるのかを、重回帰分析の手法を使って確かめる。用いるのは、被説明変数を社会サポートの欠如（「日常的サポートの欠如」と「情緒的サポートの欠如」の二つ）とする二項ロジスティック分析である。着目する説明変数は、上記で示した「チャイルドレス」か否かを表す変数である。これに加えて、婚姻状況、世帯タイプ、貧困状況を説明変数に加えたものをモデル1とする。しかし、モデル1では、チャイルドレスの推計値は、すべての婚姻状況における平均値として表されるので、モデル2からモデル4については、婚姻状況別にチャイルドレスの影響を推計したモデルとなっている。また、これまでの分析から、チャイルドレスの状況は年齢によって異なることが示唆されるため、年齢は三つの層（40歳未満、40～59歳、60歳以上）に分けて推計を行った。なお、40歳未満においては、どの年齢層においても未婚者の95%以上がチャイルドレスであったため、また、40歳未満と40～59歳の死別者および40歳未満の離別者はサンプル数が少ないため、分析を行っていない。すべてのモデルに、性別、年齢層、単独世帯か否か（単独世帯=1、複数世帯=0）、健康状態（悪い=1、よい=0）、就業状況（している=1、していない=0）、学歴（ベースは小中学校）をコントロール変数として加えている。表1に、年齢層別の結果を示す。推計値はオッズ比である。

まず、40歳未満の人々に着目すると、日常的サポートのモデル1においては、チャイルドレスのオッズ比の推計値は統計的に有意ではないが、チャイルドレスと性別のクロス項に推計値は1.97であり統計的に有意である。すなわち、男性のチャイルドレスであることは、日常的サポートが得られないことと関連がある。また、婚姻状況では、有配偶の人に比べ、未婚の人々は日常的サポートが少なく、また、単独世帯であること、貧困であること、年齢が高いことは、性別、年齢に加えて、日常的サポートの欠如と関連している。一方、モデル2にて、有配偶にサンプルを絞った推計においては、チャイルドレスのオッズ比が1%水準で有意である。すなわち、有配偶のチャイルドレスの人々は、有配偶の子どものある人に比べると、日常的サポートが欠如する確率が1.73倍となっていることがわかる。情緒的サポートについても、モデル1ではチャイルドレスのオッズ比は有意ではなく、婚姻状況や、貧困状況、就業の有無などが情緒的サポートの欠如の関連要因となっている。しかしながら、モデル2の結果から、有配偶者の中では、チャイルドレスであることが、他の要因を統制しても、サポートの欠如と関連している。

40歳から59歳においては、日常的サポートについては、モデル1の全体の推計では、貧困、単独世帯および離別、未婚、男性であることがサポートの有無と関連しており、チャイルドレスか子どもがあるかとの関連は見られない。しかし、40歳未満と同様に、モデル2の有配偶の人の中では、チャイルドレスであること、貧困状態、世帯タイプ、その他の変数をコントロールしても、サポートの欠如と関連している。離別者については、モデル1で見ると、離別者全体にて日常的サポートが欠如する傾向にあるものの、離別者の中での子ども有無については関連がみられない。また、情緒的サポートについては、日常的サポートと異なり、モデル1においてもチャイルドレスのオッズ比が有意となっている。婚姻状況

や、貧困状況、世帯タイプを統制しても、チャイルドレスであることが情緒的サポートと関連していることは興味深い。この関連は、有配偶者同士では統計的に有意となっていないが、離別者の中では3.75倍のオッズ比となっている。中年層の離別者は有配偶者に比べても1.83倍の確率で情緒的サポートが欠如しているが（モデル1）、離別者の中でもチャイルドレスの人々は子どものある人に比べて3.75倍でサポートが得られていない。

60歳以上については、日常的サポート、情緒的サポートの両方において、他の変数を統制しても、チャイルドレスであることがサポートの欠如と関連している（モデル1）。日常的サポートでは、1.60倍、情緒的サポートでは1.49倍の確率で、チャイルドレスであるとサポートが得られていない。この傾向は、有配偶者同士（モデル2）、死別者同士（モデル3）にても確認することができ、特に、その差は死別者にて大きい。しかし、有配偶者に比べて、死別者はサポートが欠如する確率が低くという結果がモデル1から得られているため、全体的には、死別者（特に子どもがある死別者）は、日常的サポートには欠如しない傾向がある。離別者については、子どもの有無は関係しているという結果は得られていないものの、貧困であるとサポートが欠如する確率が7.56倍（日常的）、5.28倍（情緒的）となる。その他の変数に着目すると、性別については、40歳未満の日常的サポート以外のすべてにおいて、男性の方が女性に比べてサポートが欠如する確率が高いことが改めて確認された。また、貧困についても、どの年齢層の日常的、情緒的サポートにおいても、オッズ比が1以上となっており、貧困者のほうが非貧困者に比べてサポートを得ることができていない。また、単独世帯であることも、40歳未満の情緒的サポート以外においてすべて、サポートの欠如と関連していることがわかった。

6. まとめと政策提言

本稿の分析からわかった主な知見をまとめると、以下となる。

まず、50歳以上の年齢のチャイルドレスの人々においても、単独世帯である率は半数を超えず、チャイルドレスの人々の半数は配偶者や他の世帯員と暮らしている。また、チャイルドレスの人々の学歴を見ると、比較的若い層（30歳代、40歳代）においては、諸外国と同じように、チャイルドレスの人々の方が高い傾向にあるが、高齢層（60歳以上）においては、その逆の傾向が見られた。さらに、貧困状況を見ると、子育て中と考えられる40歳未満、40~59歳の層においては、子どものある人の方が、チャイルドレスの人々よりも、剥奪指標で見る家計の逼迫が見られた。これは、60歳未満の層においては、まだ子育てにかかる費用が発生しているためと考えられる。しかし、高齢期においては、チャイルドレスの人々の方が、経済状況が悪い傾向が確認された。

チャイルドレスの人々の、社会サポートの状況を、日常的サポートと情緒的サポートから分析した結果、単純集計においては、あきらかにチャイルドレスの人々の方が、子どものあるヒトよりも、社会サポートが欠如している割合が多く、この傾向は、男性により顕著であり、さらに、年齢の高い層の方が強い。しかしながら、この傾向は、婚姻状況、貧困状況と

いった、チャイルドレスと隣接する事象による可能性もある。そこで、重回帰分析にて、チャイルドレスであること独自の社会サポートの欠如との関係を見ると、いくつかの興味深い知見が得られた。

一つは、情緒的サポートといった友人や同僚などから得られると考えられるサポートであっても、40歳未満においては婚姻状況、また、40歳以上においては婚姻状況に加えて、子どもの有無が深く関連していることである。特に、日本においては、未婚であることと、チャイルドレスであることが密接な関係にある中において、未婚であること、チャイルドレスであることのダブルの要因が重なり、未婚のチャイルドレスの人々は情緒的サポートが欠如する傾向にある。この結果は、他国、特にヨーロッパ諸国のチャイルドレスの人々の状況とは異なり、日本の特徴であると言える。ヨーロッパ諸国の比較においても、家族主義が強い国において、チャイルドレスの人々の孤立・社会的排除の傾向が強まるとの報告もあり、日本も同様の傾向が強いことが示唆される。

次に、比較的若い層から高齢期まで含めて、有配偶の人々の中の比較において、チャイルドレスの人々が、子どものある人々に比べて、社会サポートが欠如している傾向にある。これは、高齢期の死別者にもあてはまる。すなわち、結婚し、高齢期に配偶者と死別した後においても、同様のライフコースをたどり、かつ、子どもがある人に比べると、子どもがない人は日常的サポートおろか情緒的サポートも少ないと言える。この結果は、同様の婚姻状況別の分析をカナダのデータを用いて行った Penning and Wu (2014) の結果と比べても、逆の傾向であり、日本においては、日常的サポート、情緒的サポートが、子どもを介して得られていることが示唆される。

最後に、どのような年齢層であっても、日常的サポート、情緒的サポートの欠如に、貧困が深く関連していることである。

2021年2月に、コロナ禍によって孤立の状況にある人々が増加したことが懸念されるとして、政府は孤独・孤立対策担当室を内閣府に設置、孤独・孤立担当の大臣を任命した。しかしながら、社会サポートの欠如が、子どもの有無といったライフコースの選択に大きく関連していることは、日本社会が一定の家族像以外の家族やライフコースの人々にとって、まだまだ生きづらい社会であることを示していよう。孤立の解消には、そのような「あるべき家族」の規範を壊していくことも視野に含めた政策が必要である。

※ 本稿は、厚生労働省に調査票情報の利用の許可（厚生労働省発科0924第1号）を得て利用している。

【参考文献】

石田光規（2011）『孤立の社会学—無縁社会の処方箋』勁草書房。
国立社会保障・人口問題研究所（2014）『2012年社会保障・人口問題基本調査 生活と支え合いに関する調査 報告書』、pp.22。

国立社会保障・人口問題研究所 (2018) 『2017年社会保障・人口問題基本調査 生活と支え合いに関する調査 結果の概要』, ホームページ, <http://www.ipss.go.jp/ss-seikatsu/j/2017/seikatsu2017summary.pdf> (2021年3月30日最終確認)

穴戸邦章 (2008) 「高齢者の社会的ネットワーク」谷岡・仁田・岩井編『日本人の意識と行動：日本版総合社会調査 JGSS による分析』東京大学出版会, pp.91-102。

菅 桂太 (2008) 「わが国における 40 歳時無子の傾向と要因に関する考察—家族形成行動の観点から」『人口学研究』第 42 号, pp.57-70。

大日義晴・菅野剛 (2016) 「ネットワークの構造とその変化：「家族的関係」への依存の高まりとその意味」稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人編『日本の家族 1999-2009：全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学』東京大学出版会, pp.69-90。

藤森克彦 (2010) 『单身急増社会の衝撃』日本経済新聞出版。

藤森克彦 (2017) 『单身急増社会の希望—支え合う社会を構築するために』日本経済新聞出版。

中村二郎・菅原慎矢 (2016) 「同居率減少という誤解—チャイルドレス高齢者の増加と介護問題—」『季刊・社会保障研究』第 51 巻第 3・4 号, pp.355-368。

守泉理恵 (2019) 「日本における無子に関する研究」『人口問題研究』第 75 巻第 1 号, pp.26-54。

Albertini, Marco and Mencarini, Letizia (2014) “Childlessness and Support Networks in Later Life: New Pressures on Familiastic Welfare States?,” *Journal of Family Issues*, 35(3), pp.331-357.

Baranowska-Rataj, Anna and Anita Abramowska-Kmon (2019) “Number of children and social contacts among older people: the moderating role of filial norms and social policies,” *European Journal of Ageing*, 16, pp.95-107.

Cwikel, Julie., Gramotnev, Helen and Lee, Christina (2006) “Never-married childless women in Australia: Health and social circumstances in older age,” *Social Science & Medicine*(2006), Apr;62(8): pp.1991-2001.

Deindl, Christian and Brandt, Martina (2017) “Support networks of childless older people: informal and formal support in Europe,” *Ageing & Society*, 37(8), pp.1543-1567.

Dykstra, Pearl A. and Hagestad, Gunhild O. (2007) “Childlessness and Parenthood in Two Centuries: Different Roads – Different Maps?,” *Journal of Family Issues*, 28(11), pp.1518-1532.

Dykstra, Pearl A. and Keizer, Renske (2009) “The wellbeing of childless men and fathers in mid-life,” *Ageing & Society*, 29, pp.1227-1242.

Hansen, Thomas., Slagsvold, Britt and Moum, Torbjorn (2009) “Childlessness and Psychological Well-Being in Midlife and Old Age: An Examination of Parental Status Effects Across a Range of Outcomes,” *Social Indicators Research* , 94, pp.343-362.

Klaus, Daniela and Sebastian Schenettler (2016) “Social networks and support for parents and

childless adult second half of life: Convergence, divergence, or stability?, “Advances in Life Course Research, 29, pp.95-105.

Mair, Christine (2019)“Alternatives to Aging Alone?: Kinlessness and the Importance of Friends Across European Contexts, “J Gerontol B Psychol Soc Sci, 74(8), pp.1416-1428.

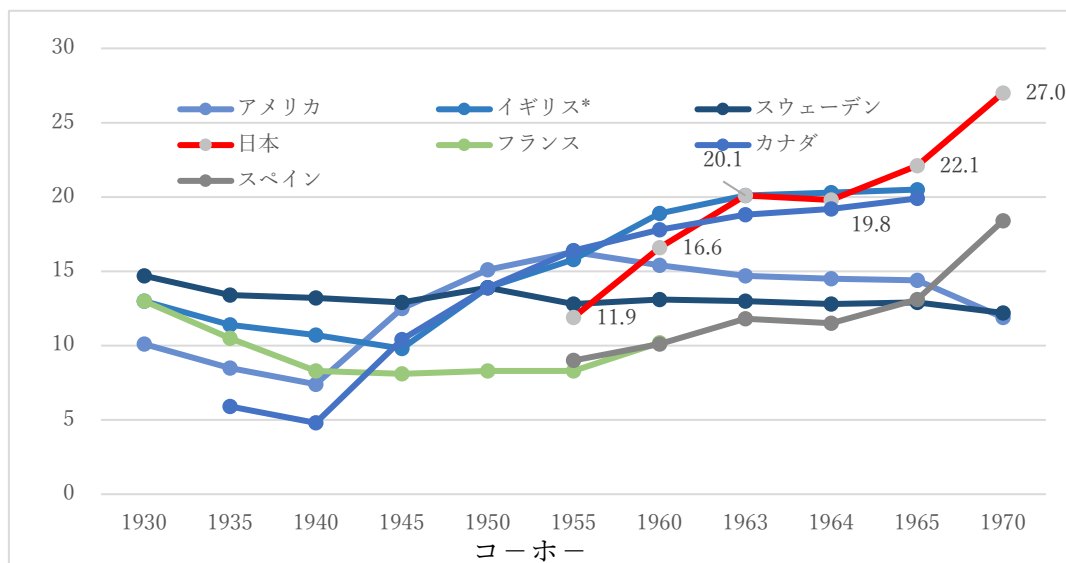
Penning, Margaret J. and Zheng Wu (2014) “Marital Status, Childlessness, and Social Support among Older Canadians,” Canadian Journal on Aging, 33(4), pp.426-447.

Turnbull, Beth, Graham, Melissa L. and Taket, Ann R. (2016) “Social Exclusion of Australian Childless Women in Their Reproductive Years,” Social Inclusion 4(1), pp.102-115.

-
- i. 「確定チャイルドレス (definitive childless)」とは、50歳時点において、子どもがない人を指す。
 - ii. しかしながら、Mair(2019)の用いたEU“Survey of Health, Ageing, and Retirement in Europe (SHARE)”wave 6のデータにおいては、分析に用いた対象者の7割が友人の数を0と記述しており、分析結果が一部の友人が多い高齢者の状況に強く影響されている可能性がある。
 - iii. 本質問項目は、この他に「1. 子どもの世話や看病」「2. (子ども以外の) 介護や看病」「3. 重要な事柄の相談」「5. 喜びや悲しみを分かち合うこと」「6. いざという時のお金の援助」「8. 家を借りる時の保証人を頼むこと」「9. 成年後見人・保佐人を頼むこと」の項目があるが、1, 2は該当する場合がないことがあること、6, 8, 9については友人・知人よりも親族に頼ることが多いこと、3, 5については情緒的サポートと解釈できるが、より一般的に友人・知人に頼むことがあると考えられる「愚痴を聞いてくれること」の方が適していると判断した(例えば、3については公的相談機関も考えられ、また、5についてはより広く「日本国民」などといったことも想定されるため)。
 - iv. ちなみに本調査において1970年生まれの女性(n=161)のチャイルドレスの割合は24.8%であり、本データは国連データに比べて若干チャイルドレスの割合が低い。

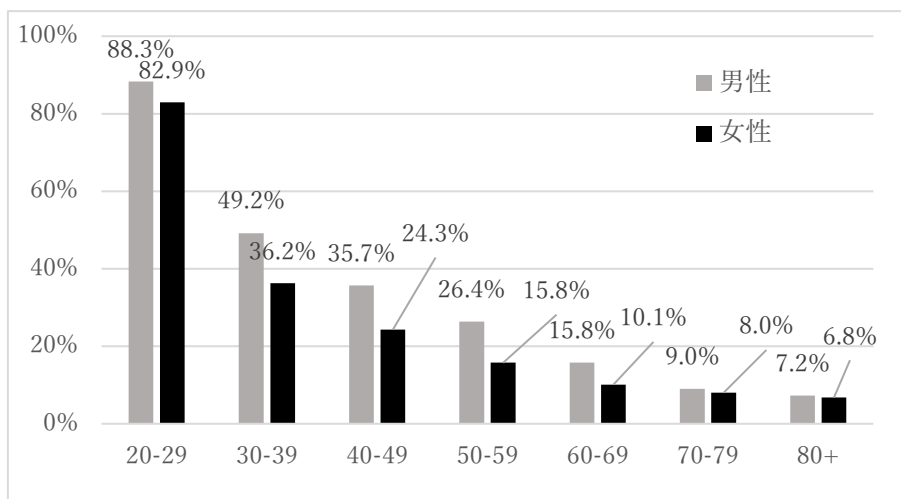
【図表】

図1 先進諸国のチャイルドレス: コホート別(%)



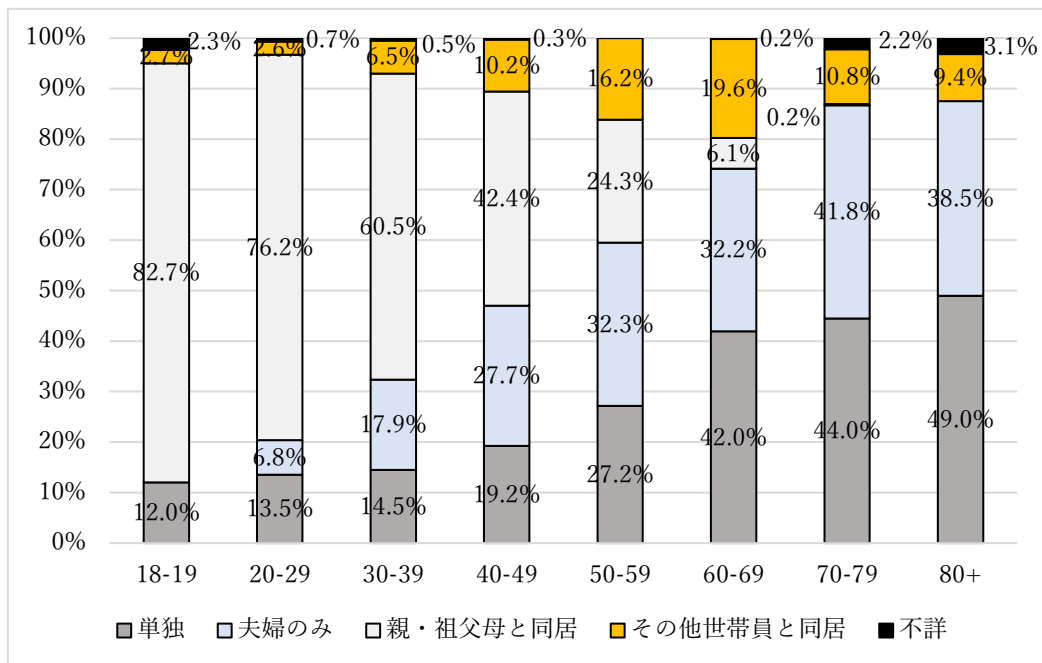
出所：OECD Family Database SF2.5. (取得日 2020/10/28)

図2 チャイルドレスの割合： 年齢層別、性別 (%)



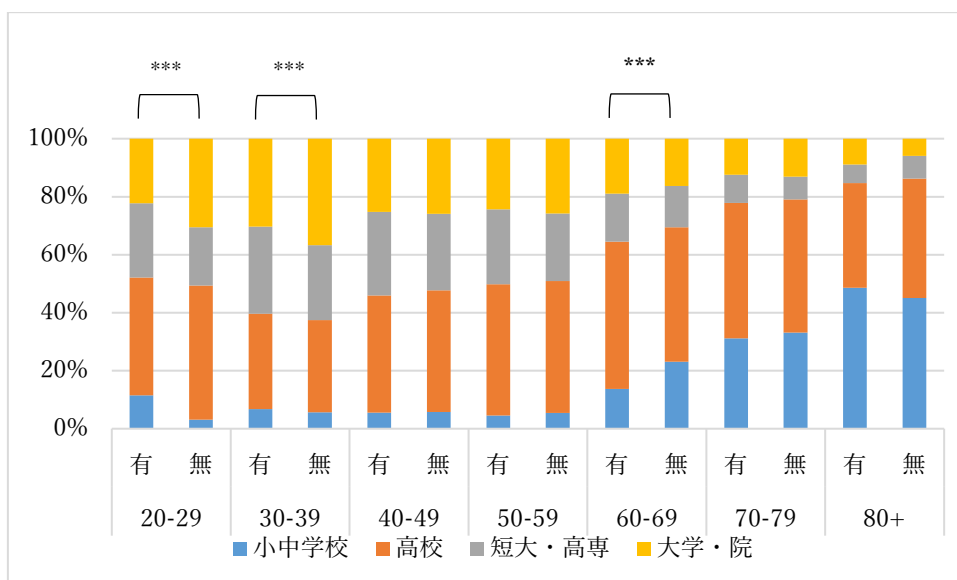
出所：国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合い調査」(2019年) から筆者推計

図3 チャイルドレスの世帯構造：年齢層別 (%)



出所：国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合い調査」(2019年)から筆者推計

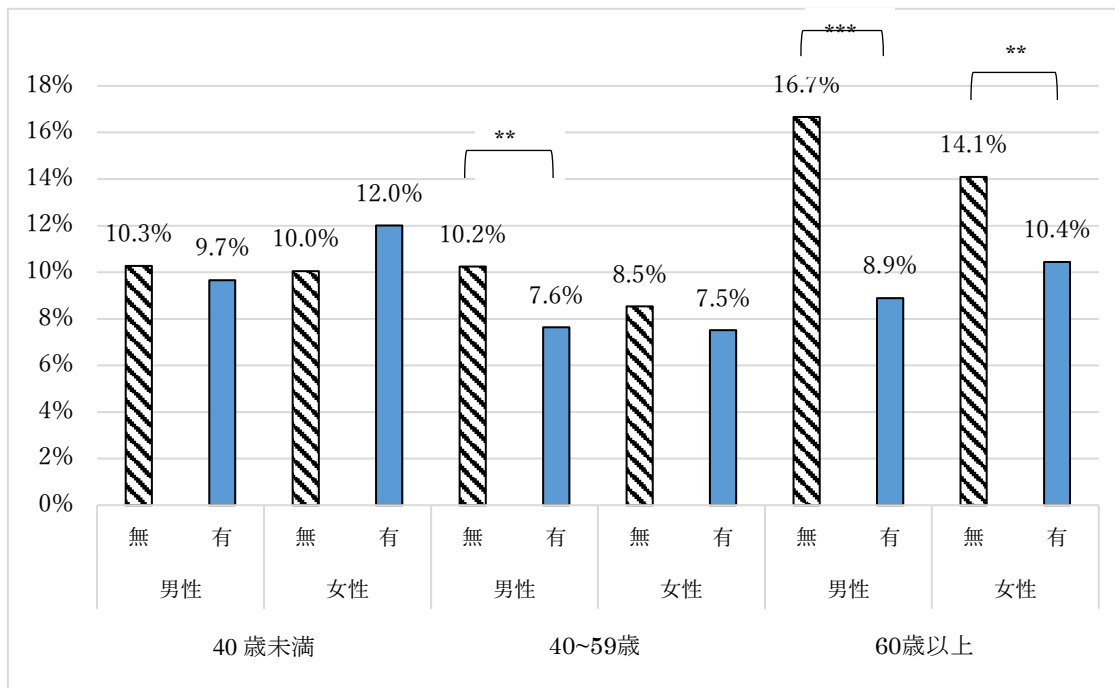
図4 学歴の分布：年齢層別、子どもの有無別 (%)



注： χ^2 検定による。***1%水準、**5%水準

出所：国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合い調査」(2019年)から筆者推計

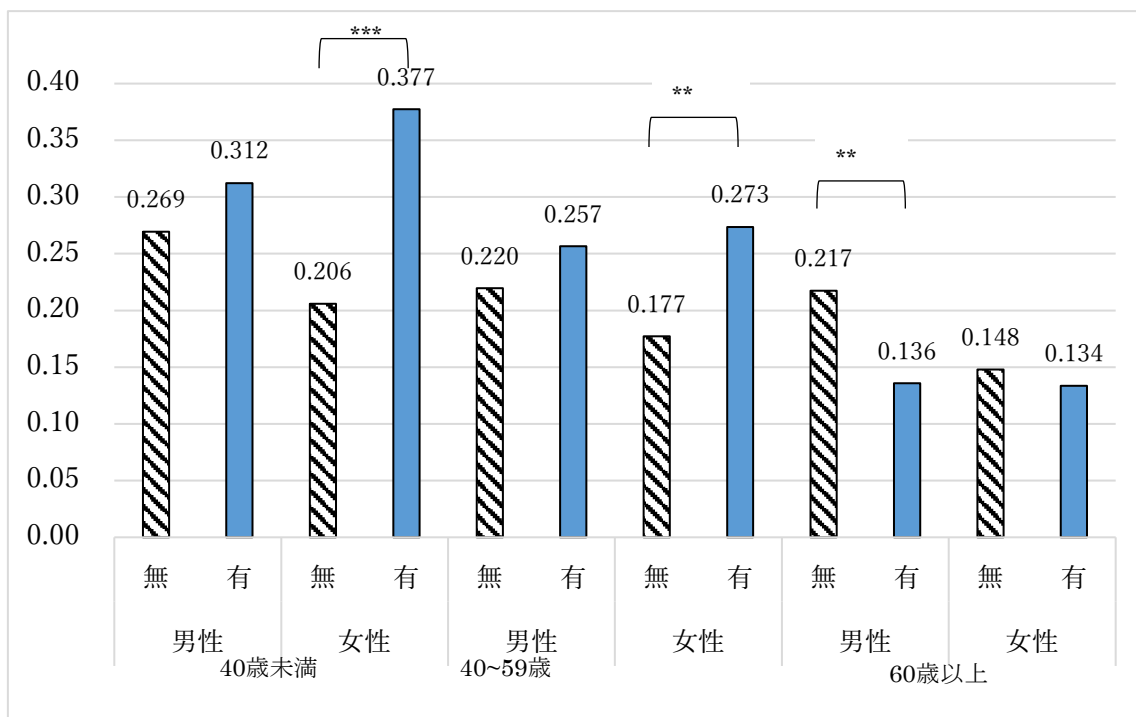
図5 低支出の割合：子どもの有無別、年齢層別、性別 (%)



注： χ^2 検定による。***1%水準、**5%水準

出所：国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合い調査」(2019年)から筆者推計

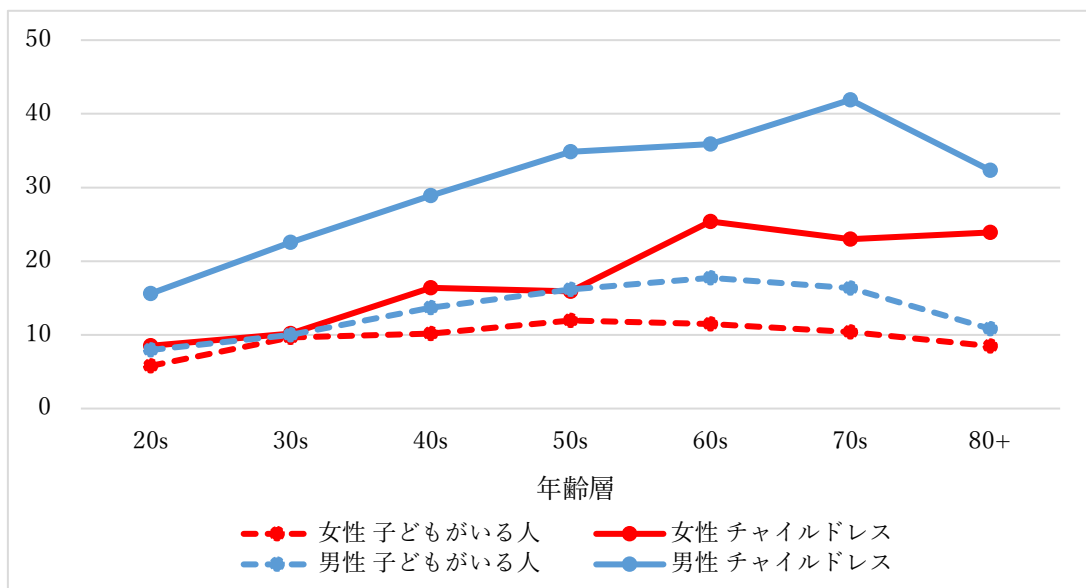
図6 平均剥奪項目数：子どもの有無別、年齢層別、性別



注：t 検定による。***1%水準、**5%水準

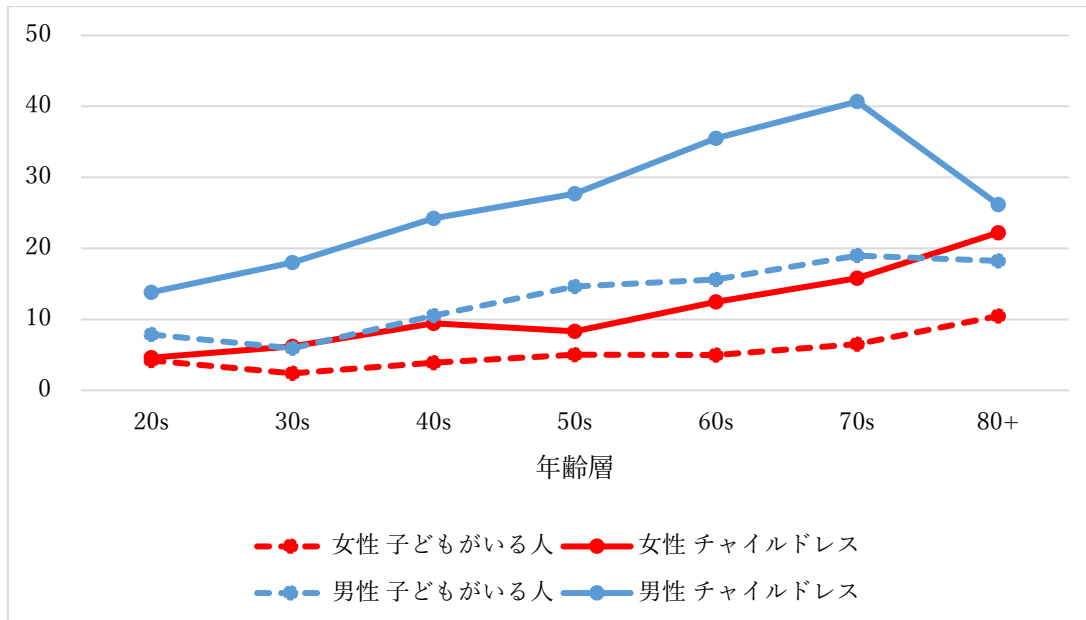
出所：国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合い調査」(2019年)から筆者推計

図7 日常的サポートがない人の割合： 年齢層別、性別、子どもの有無別 (%)



注： 子どもの有無別の χ^2 検定の結果、20歳代の男性と20歳代、30歳代の女性以外では1%水準に統計的に有意な差あり。 出所：国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合い調査」（2019年）から筆者推計

図8 愚痴を聞いてくれる人がない人の割合： 年齢層別、性別、子どもの有無別 (%)



注： 注： 子どもの有無別の χ^2 検定の結果、20歳代の男性と20歳代の女性以外では1%水準に統計的に有意な差あり。

出所：国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合い調査」（2019年）から筆者推計

表1 社会サポートの欠如の規定要因： ロジスティック分析 年齢3層別

(A) 40歳未満	(1)日常的サポートの欠如				(2)情緒的サポートの欠如			
	Model 1		Model 2		Model 1		Model 2	
	全体		有配偶のみ		全体		有配偶のみ	
	O.R.	O.R.	O.R.	O.R.	O.R.	O.R.	O.R.	
childless (=1)	0.80	1.73 *	1.41	3.12 **				
性別(女性=0, 男性=1)	1.23	1.12	3.85 ***	4.07 ***				
チャイルドレス×性別	1.97 ***	0.55	0.97	0.33 *				
剥奪(あり=1, なし=0)	1.70 **	1.60	2.34 ***	5.17 ***				
剥奪×性別	0.70	0.85	0.42 **	0.29 **				
年齢(ベース=30-34歳)	0.00	0.00	0.00	0.00				
18-19歳	0.30 ***	--	0.27 ***	0.00				
20-24歳	0.65 **	0.70	0.56 ***	0.00				
25-29歳	0.75 *	0.51 **	1.00	1.92				
35-39歳	1.05	1.09	1.40 **	2.44 ***				
単独世帯(=1,複数世帯=0)	2.15 ***	2.20	1.15	2.21				
健康状況(悪い=1)	1.22 **	0.97	1.15	0.89				
就業(している=1,していない=0)	1.00	0.83	0.49 ***	0.64				
婚姻状況(base=有配偶)	0.00	0.00						
未婚	1.58 **		2.57 ***					
死別	5.05		17.57 **					
離別	1.39		0.93					
学歴(base=小中学校)								
高校	0.93	1.07	0.77	1.28				
短大・高専	1.05	0.80	0.68	1.14				
大学・大学院	1.09	1.00	0.78	1.43				
切片	0.08 ***	0.11 ***	0.04 ***	0.01 ***				
n	3958	1706	4108	1720				
L.L.	-1366.19	-507.599	-1023.08	-287.077				
R2	0.0515	0.0141	0.0977	0.0593				

(B) 40~59歳	(1)日常的サポートの欠如			(2)情緒的サポートの欠如		
	Model 1	Model 2	Model 3	Model 1	Model 2	Model 3
	40~59歳	有配偶	離別	40~59歳	有配偶	離別
	O.R.	O.R.	O.R.	O.R.	O.R.	O.R.
childless (=1)	1.23	1.50 **	0.94	1.64 **	1.36	3.75 **
性別(女性=0, 男性=1)	1.56 ***	1.70 ***	1.68	4.03 ***	3.81 ***	8.24 ***
チャイルドレス×性別	1.39 *	1.00	1.57	0.88	0.94	0.27 **
剥奪(あり=1, なし=0)	1.59 ***	1.58 **	1.80 *	2.30 ***	2.56 ***	1.31
剥奪×性別	0.90	0.85	0.74	0.52 **	0.54 *	0.66
年齢(ベース=40-44歳)						
age 45-49	1.09	1.05	0.88	0.97	1.05	0.74
age 50-54	1.12	1.10	1.06	1.17	1.29	1.40
age 55-59	1.16	1.03	1.66	1.23	1.21	1.87
単独世帯(=1,複数世帯=0)	2.29 ***	2.11 ***	1.39	1.35 **	0.89	0.50 **
健康状況(悪い=1)	1.17 *	1.19 *	1.45	1.41 ***	1.36 ***	2.30 **
就業(している=1,していない=0)	0.84	0.69 **	1.45	0.69 ***	0.48 ***	2.01
婚姻状況(base=有配偶)						
未婚	1.42 **			1.88 ***		
死別	1.19			1.35		
離別	1.75 ***			1.83 ***		
学歴(base=小中学校)						
高校	0.79	0.55 ***	1.46	0.60 ***	0.46 ***	0.50 0
短大・高専	0.66 **	0.51 ***	0.84	0.52 ***	0.35 ***	0.34 *
大学・大学院	0.77	0.55 ***	2.63 *	0.71 *	0.58 **	1.31 0
切片	0.13 ***	0.05 ***	0.09 ***	0.06 ***	0.11 ***	0.04 ***
n	5649	4311	423	5813	4429	433
L.L.	-2283.75	-1554.77	-221.683	-1765.52	-1149.22	-148.193
R2	0.0642	0.0216	0.0648	0.1034	0.0668	0.1582

IPSS Working Paper Series No.54

(6) 60歳以上	(1) 日常的サポートの欠如				(2) 情緒的サポートの欠如			
	Model 1	Model 2	Model 3	Model 4	Model 1	Model 2	Model 3	Model 4
	高齢者 O.R.	有配偶 O.R.	死別 O.R.	離別 O.R.	高齢者 O.R.	有配偶 O.R.	死別 O.R.	離別 O.R.
childless (=1)	1.60 **	1.71 **	3.85 ***	1.46	1.49 *	1.96 **	2.90 **	1.27
性別(女性=0, 男性=1)	1.71 ***	1.59 ***	1.76 **	2.31 ***	3.60 ***	3.02 ***	4.54 ***	8.58 ***
チャイルドレス×性別	1.37	1.14	1.95	0.85	1.21	0.69	1.22	2.02
剥奪(あり=1, なし=0)	1.93 ***	1.51	1.84	7.56 ***	1.75 **	1.30	1.37	5.28 **
剥奪×性別	0.98	1.22	1.25	0.44	0.96	1.38	1.11	0.56
年齢(ベース=40-44歳)								
age 65-69	1.32 ***	1.29 **	1.19	1.48	1.55 ***	1.57 ***	1.13	2.13 *
age 70-74	1.11	1.10	1.03	1.49	1.75 ***	1.91 ***	1.18	1.38
age 75-80	0.94	0.94	0.69	1.43	1.64 ***	1.71 ***	1.35	1.66
age 80-85	0.85	0.85	0.61	0.91	2.16 ***	2.08 ***	1.49	31.62 ***
age 85-90	0.60 **	0.72	0.34 **	0.99	1.61 **	2.03 **	0.85	1.22
age 90+	0.44 **	0.80	0.26 **	1.00	1.42	2.68	0.64	1.00
単独世帯(=1, 複数世帯=0)	2.63 ***	3.48 ***	2.33 ***	2.75 ***	1.83 ***	3.23 ***	1.43	1.68
健康状況(悪い=1)	1.09	1.08	1.15	0.84	1.10	1.05	1.23 *	1.44
就業(している=1, していない=0)	0.83 **	0.87	0.73	0.59 *	0.86 *	0.92	0.77	0.54 *
婚姻状況(base=有配偶)								
未婚	0.84				1.83 ***			
死別	0.75 *				1.10			
離別	1.35 *				1.66 ***			
学歴(base=小中学校) 高校	0.92	1.00	0.71	1.29	1.00	1.08	0.73	2.26 **
短大・高専	1.10	1.27	0.76	1.67	0.96	1.01	0.72	2.01
大学・大学院	1.10	1.17	0.81	2.92 **	1.10	1.22	1.08	1.82
切片	0.10 ***	0.10 ***	0.11	0.08 ***	0.03 ***	0.04 ***	0.06 ***	0.02 ***
n	6200	4632	963	333	6534	4877	1021	350
L.L.	-2455.7	-1796.52	-317.462	-169.65	-2285.28	-1645.8	-325.316	-130.805
R2	0.0624	0.0237	0.1185	0.1555	0.0945	0.0578	0.1198	0.2807